
セレストの旅

那岐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セレストの旅

【Nコード】

N1326S

【作者名】

那岐

【あらすじ】

忌子である私は、自分の居場所を手に入れるための旅にでた。目的は薬草を扱うお店を開くこと。

必要なのは1,000トリン＝一家4人が25年生活できる金額。

駆け出し魔術師が夢をつかむために頑張ります。

（このお話はグループSNEさまのSW2・0の世界観をベースに作っています）

R15と残酷描写ありは、今のところ、念のため、です。

旅立ち（１）

「忌子^{いみこ}」というのをご存知だろうか。

その言葉の通り「忌まわしい子」としてこの世に生を受けた存在だ。

その子は総じて整った容姿を持ち、何らかの能力に優れた者が多い。

それなのにどうして「忌まわしい」のかといえば、その存在が「穢れて」いるからだ。

その身の穢れは頭部に小さな角として現れる。

その角ゆえに生まれると同時に母殺しの罪を背負うことも多い。人の中にあつて、人に馴染めない存在。

それが忌子、つまり私という存在だ。

私は鏡を覗き込んで、髪の間から小さく見えるふたつの角に触ってみた。

もしも、コレがなかったら私は家族と今も暮らしていたのだろうか？

私は幸いにして両親にも兄弟にも愛されたが、もしも母が命を落としていたら、他の忌子たちのように彼らから憎まれたのだろうか？

実際、私を生んだ母は数日生死の境を彷徨ったというから、私が母殺しの罪を負った可能性は否定できないのだ。

もしも。

「だめだめ！

旅立ちには明るい明日への一歩。

いつまで辛気臭い事を考えてるの？」

鏡の中の自分に説教をすると、ブラシを手に髪を編み込む。編み込んだ髪で角を隠すようにして、更に柔らかい布の帽子を被る。手間はかかるが余計な面倒を避けるためには仕方ない。

「セレスト。

用意は出来た？」

控え目なノックとともに聞こえたのはイゼベルの声。
私を実の娘のように可愛がってくれた、師匠の奥様。

「今行きます」

「本当に行ってしまうのね」

「はい、イゼベルさまとお別れするのは寂しいのですが」
「いつでも帰ってきていいのよ？」

うつん、たまには顔を見せに来て。

そうしないと、私が寂しいわ」

優しい腕に抱きしめられると鼻の奥がツンとする。

でも、そんな感傷も一瞬だった。下から師匠の大声が聞こえて、二人で苦笑する。

偏屈で変わり者の師匠と優しくて美人のイゼベルがどうして夫婦なんかやってるのか、その謎は結局解らないままだったな。

少し目の赤いイゼベルと一緒に居間兼食堂に降りると、不機嫌そうな師匠に睨まれた。

「まったく。」

女というのは身支度に時間がかかっていかん」

「申し訳ありません、師匠」

「女の冒険者なんてものは周りから甘く見られるものだ。
それがひよつこの魔術師となれば尚更。」

ついている隙を与えてはならん」

「はい。」

今まで、本当にお世話になりました。

行つてまいります」

無言で頷いた師匠と、涙声で気をつけて、というイゼベルの姿を、もう一度目に焼き付ける。

私を温かく包んでくれた二人を残して、私は今日、旅立つ。

欲しいものは忌子の私が認められる場所。

そんな場所を手に入れるための旅だ。

旅立ち（1）（後書き）

せっかく「なろう」さまでエイプリル・フル企画をされていたので便乗、と思いました。が、間に合いませんでした。

旅立ち（２）

師匠の家を出て向かったのはメリッサさんの酒場だ。

この街を出るにあたってたった一人で歩いて出るほど馬鹿ではない。

そんなことをしたら、危険な動物が蛮族の餌食になるのは間違いない。

駅馬車に乗ってもいいが、料金が少々高い。ただでさえ少ない所持金を減らすのは得策ではなかった。

私がとったのは、冒険者としてキャラバンの護衛になる方法だ。

そのキャラバンの受付をしているのがメリッサさんの酒場だ。

行商人や旅芸人、駅馬車に乗るほどの持ち合わせがない者は徒党を組んで町と町の間を移動する。それをキャラバンというが、それを護衛するのだ。もともと懐に余裕のない者たちが集まっているから、報酬は多くはない。代わりに私のような駆け出しの魔術師が潜り込むこともできる。護衛でない者の中にも腕に覚えのある者はいるから、護衛としての報酬は夜間の見張りの報酬と言い換えることもできた。

酒場に向かう道すがら、街並みを目に焼き付けるようにして歩く。朝早い時間なので人通りは多くない。知人には先日送別会を開いてもらい、見送りはいららないと言ってあったので、今更別れを惜しむ人はいない。

結局、この街で１０年を過ごしたが、最初から最後まで「人間」で通したことになる。忌子だとはなかったことは有り難いが、優しかった人たちを騙したようで、少し心が痛んだ。

酒場の前には、既に多くの人が集まっていた。

メリッサさんに挨拶すると、今回のキャラバンのまとめ役という男の元に案内された。

戦士風で目つきが鋭いので、ただ見られているだけで睨まれたような気分になった。

「アーロン、こっちはセレスト。魔術師ね。キャラバンの護衛は初めてだからいろいろ教えてやって」

「よろしくお願いします」

メリッサさんに紹介してもらい、慌てて頭を下げた。

「よろしく。魔術師ということだが、どの程度使える？　<雷>^{いかずち}は？」

言われて顔が引き攣った。魔術の呪文には第1位から第15位までであつて、第1位が一番下、第15位が一番上だ。位が上がるほど難易度が上がり、威力も大きくなる。<雷>は第4位に属する呪文だから、一人前の魔術師なら使えて当たり前だ。半人前だと自己申告するようで情けないが、仕方ない。

「いえ、申し訳ありません。第2位までです」

「とすると、<魔力の刃>^{やいば}と<眠りの砂>、<灯火>^{ともしび}は使えるな？」

「はい」

その辺が一番使うから心しておけということか。

そのまま、護衛が集まっているあたりに移動する。

このキャラバンは剣士のアーロンさんとそのチームが固定の護衛で、彼らがまとめ役になっているらしい。アーロンさんのチームは全部で5人。服装から判断すると戦士が2人、神官が1人、精霊遣い^{せいりやう}が1人、魔術師が1人のようだ。彼らの以外の護衛は私と一緒にいかにも駆け出しといった様子で年も若そうだった。

他には3人のチームがひとつ。あとは私も含めて単独参加が3人。アーロンさんのチームの魔術師に注意事項などを聞いて出発時間を待った。

内容は、師匠から耳にタコができるほど聞かされていたことだったので、何とかなりそうだ。まあ、理論と実践は違う訳だけど。

出発までもうひとつ、4人のチームが加わり、護衛は全部で15人、護衛対象は26人の総勢41人で次の町を目指すことになる。

ついでに荷馬車が5台と馬が4頭。ここは南の交易都市だけあって、キャラバンの規模も大きいのだそうだ。

簡単な自己紹介が済むと、アーロンさんの指示で荷馬車ごと、4つに分かれた。こうすると、ひとつの荷馬車につき、護衛は3人から4人。互いによく知らない駆け出し冒険者が、連携をとって戦うことなんてできるはずもないので、基本的には荷馬車2台ずつが連携することになった。

アーロンさんは先頭のグループ。ここに、同じチームの神官と精霊遣いが加わり、4人のチームと私で8人。後ろのグループはアーロンさんのチームのもうひとりの戦士と魔術師に、女性ばかりの3人のチームと単独参加の2人が加わって7人。馬車ごとに見ると実は偏りがあるけど、2台一緒ならバランスが良くなった。なるほど、こんなやり方もあるのか。

護衛は徒歩か馬で馬車を囲み、護衛以外でも多少は戦える者は周りを歩いていく。行商人のお兄さんの方が私よりもずっと強そうだな、と思って、また落ち込みそうになった。

旅立ち(2)(後書き)

こそつと第1話を載せたところ、早速「お気に入り」登録してくださった方がいてびっくりです。

読んでいただき、ありがとうございました！

“東の砦”の街へ（1）

「いえ、一番はやはりハモロギだと思うわ」

「ハモロギ？ 確かに効果は高いですけど、下処理に手間がかかりすぎて、大量に用意できないんじゃないやありませんか？」

「手間？ 乾燥させるだけならそんなにかからないでしょう？」

「それだけでいいんですか？！」

「あ、いや、やっぱりひと手間はかかるかしら……」

あれから2日。次の町までは何事もなければ3日の距離だ。

私は2台目の馬車の横で薬草談義に熱中していた。いや、むしろ、形としては一方的に教えを受けている、の方が正しいのかもしれない。

4人チームの紅一点、弓使いのエルフであるクローディアは冒険者になる前は薬師という経歴の持ち主だ。実家も村で代々薬師をしていたという筋金入り。本音を言えばすぐにでも護衛をやめて、薬草についてたつぷりと教えを請いたい。そのくらい彼女の知識は豊富だった。私も師匠のところでかなり知識をつけたと思ったけど、やはりエルフは森の民。さまざまところで違いがあり、それが興味深い。

「おい」

彼女のチームのサミュエルに声をかけられて、視線を前に向ける。前方の茂みに何かが潜んでいる。馬に乗って視界が高くなった分だけ彼の方が早く気づいたのだ。

「左右の岩陰にもいるわよ」

「左に4、右に3、でしょうか」

「惜しい、左に5、右に3ね」

「前に4で合わせて12だな」

小さくつぶやくと、サミュエルはアロンさんの許へ報告に行った。

アーロンさんの方もきつと気付いてはいるんだろうけど。

私たちも、その間に馬車を停めさせ、戦えない人たちを荷馬車に隠し、その周りを囲む。

その辺は指示を待つまでもない。

相手はゴブリンと呼ばれる蛮族だ。1体ずつは大して強くないが、集団だと少し厄介だ。

戦闘は、アーロンさんのチームの精霊遣いの魔法から始まった。

それに続くように、他の魔術師や精霊遣いの魔法、クローディアの矢が飛び、それをかい潜った敵は、前に立った戦士たちが倒していく。残った敵を魔法と弓が狙い、打ち洩らしは戦士が片付ける。もともと数で勝っていたので、勝負はあっという間だった。後ろのグループはほとんど出番がなかったほどだ。

私もく魔力の刃の呪文を唱え、ゴブリンに傷を負わせた。が、倒すほどの威力はなかったようで、サミュエルが止めを刺していた。他の魔法使いたちも似たようなものだ。アーロンさんのチームの2人だけが別で、一撃で仕留めていた。呪文の位は似たようなものだから、この辺は術者の魔力の違い、ということだろう。

すごいのはクローディアで、一発につき1体で、一人で4体仕留めてしまった。

本人は、「伊達に大きい弓持つてる訳じゃないのよ」と笑っていたが。

「分かる、俺たちの苦労？」

いくら4人の中で女がクローディア一人っていつても、コレだろ？

結局男3人いても勝てないんだよ」

サミュエルがおどけて嘆いてみせるが、クローディアに軽くあしらわれた。

「まさか。

勝てないんじゃないくて、私に勝たせてくれてるんでしょ？

3人ともこれ以上ないほどの紳士なもの。

レディーに勝ちを譲ってるんでしょ？」

「うつわ、ヤメロ。」

鳥肌立った」

「何、それ？」

どの部分に対してかしら？

返答によつては後ろから矢を射かけてあげるわよ」

「いや、それ本気で死ぬからヤメテクダサイ」

このチームは戦闘中でもこんな感じた。

常に明るい、というか別のことに集中している時ほど、内容がくだらないかもしれない。

昨夜、それぞれに武器の手入れをしながら、魔術書を読みながらの4人の会話は漫才のようだった。

襲撃は結局この1回だけだった。3日後には次の町に着き、そこで1日の休憩をとる。

その間に買い出しをしたり、商人たちは取引をしたりする。キャラバンのメンバーのほとんどは“東の砦”の街を目指しているので、これから町に着くたびに、人数はだんだん増えていくのだ。

“東の砦”の街へ（1）（後書き）

今回も読んでいただき、ありがとうございました！

“東の砦”の街へ（2）（前書き）

長らく間があきました。

“東の砦”の街へ(2)

「情報とは即ち金であり、命綱である」とは師匠の座右の銘だ。師匠は魔術師だったので、しばしば「情報」は「知識」に変わった。

そこを指摘すると、この場合は2つがほぼ同義であるという証明を延々聞かされる羽目になる。その間、私の授業は一切中止となり、途中で邪魔が入る度に中断しつつもイゼベルさまが止めるまでは絶対に止まらない。

あの3日間は本当に辛かった。イゼベルさまがご友人の看病のために家を空けていたために、止めてくれる人がいなかったのだ。ろくに食事も睡眠もとらないままに師匠は証明という名の説教を続け、私はそれを付き合わされた。隣の家奥さんが心配してイゼベルさまを呼びに行ってくれなければ、たぶん二人とも死んでいただろう。魔術師は研究に没頭すると寝食を忘れるというが、あの時の師匠はまさにそれだった。

だから、師匠の座右の銘は、その意味とともにしっかりと私に刻み込まれている。もっともそれ以上に私に刻み込まれたのは「人の話を遮らない」、「長いものには巻かれるふりをしろ」だ。

「なるほど。」

それがセレストが記録魔になった訳ですか」

いや、なかなか凄まじい師匠ですね、などと自身も魔法使いであるジャックが頷いている。きっかけは、私が持っている紙の束。旅の間、暇を見つけては私が色々書き付けているのを見て不思議に思っていたらしい。見てもいいかと聞かれて、見せたら記録魔、情報オタクなどと言われた。もう少し、言葉を選んでほしかった。

書くことは嫌いではないし、もう癖のようなものだ。師匠の言葉

を実践しているつもりはないが、影響を受けているのは間違いない。そう思って師匠の話をしたのだが、サミュエルは納得できなかったようだ。

「コラ待て、今の話でどうしてそう繋がるんだ？」

師匠の理不尽な仕打ちに耐え切れず、旅に出た、って流れじゃないのか？」

「師匠は偏屈で変人ですけど、理不尽ではありませんよ？」

うちの師匠を侮辱しないでください、と睨むと、ますます混乱したようだ。

「確かに得た情報、というか知識をどう使ったかが魔術師の腕の見せ所よね。」

商人にとってはまさに『情報は命』だろうし」

「まあまあ、魔術師なんて変わり者が多いんだから、あまり真剣に考えちゃ、だめだよ」

「カイン、お前は今の話、理解できるのか！？」

俺だけか？ 理解できない俺がおかしいのか？」

「一応話としては、ね。」

剣士だつて、ひたすら、腕を磨くだろ？ それこそ終わりなく。

あれが、魔術師は知識の探求になっただけだよ」

「いや、しかし……」

ますます混乱したサミュエルを放ってクローディアが、私の手元の紙を覗き込む。

「それにしても、内容が結構ごちゃごちゃなのね？」

「一応、各地の地理的なことと、魔術と薬草に関係ありそうなことだけのつもりなんです。まあ、気が向いたら何でも書いてるかもしれない」

本当はそこに商売のことが入ってくる。お店を開くということは商売の知識がいるが、私にはその部分の知識が足りていないからだ。

「人の記憶なんてあてになりませんからね。後で見返すと結構発見があつて面白いんですよ。時々、思いがけなく役に立ちますし」

「ふうん？ 例えば？」

「そうですね、クローディアに関係ありそうなところだと、珍しい薬草が生えていた場所とか？」

あとは、病気用の薬は小さな町でもそれなりに引き取ってもらえるけど、傷薬はあまり引き取ってもらえないとか？」

「どうしてだ？」

クローディアに話したのに、くいついてきたのはサミュエルだった。

「まあ、そうよねえ。ウチ、薬師だったから何となく分かるわ」

そう言って、クローディアが代わりに説明してくれた。

「小さな怪我は自分で手当てするけど、大きな怪我だと神殿か医者で治してもらうでしょ。」

だから、傷薬って小さな町の薬屋じゃあまり需要ないのよ。

切らしちゃいけないけど、そんなに大量にあっても困るのね。

小さい町だったら、神殿か医者に薬草持ち込む方が確実に引き取ってもらえるわ」

「はい。例外は大きな街ですね。」

大きな街は冒険者が多いので、彼らからの需要が高く、かなり大量に引き取ってもらえます」

所詮、商売は需要と供給だ。

私は“東の砦”の街を目指すのも、そのためだ。

冒険者が多く、“南の交易都市”ほどではないが、交易も盛んだ。師匠の師匠という人もいて、魔術の指南をしてくれることになっている。忌子は冒険者になる者が多いから、“東の砦”には私と同じ忌子が比較的多いだろう、というのも大きい。

人族の敵である蛮族との戦いにおいて、最前線とは言わなくとも前線に近く、重要な役割も持っているので、魔術師にしる、薬屋にしる、需要は高い。

私の活動の拠点として、ここほど相応しい街はなかった。

「さすがに最近はクローディアの薬草談義が多いですね」

「エルフは森の民ですからね。薬草の知識も豊富だし、薬草の処理の仕方もあるものとは違ふことがあつて、本当に興味深いです。と、いうことで」

と、そこまで言つてクローディアの両手をしっかりと握る。

「今夜もご教授、お願いいたします!」

「あ、ええ」

若い女性が二人顔を寄せ合つて熱く語り合う内容が、薬草について。

やれやれ、と男性陣が呆れたように溜息をついたのは、私たちに
とつてはどうでもいいことだ。

“東の砦”の街へ(3)

“南の交易都市”から“東の砦”の街までは馬を無理してとばせば7日の距離だ。駅馬車なら15日。私たちのキャラバンは徒歩のスピードで進み、更に町ごとに1泊しているので30日ほどかかるらしい。今日は出発してから15日目。距離も時間もちょうど折り返し地点だ。人数も出発当初から少しずつ増え、およそ2倍になっていた。

人数が増えたことによつて馬車の数も増えた。当然護衛の数も増え、今は先頭、真ん中、後ろの3つのグループに分かれて行動していた。サミュエルのチームと私は、配置換えで後ろのグループになっていた。指揮を執るのは、アーロンさんのチームの剣士で竜人のロウさんと魔術師のクロエさんだ。

せっかくクロエさんの近くに配置されたのだから、この機会に先輩魔術師の戦い方と動き方をしっかり盗むつもりだ。

私はクロエディアと一緒にいることが多かったせいか、何となくサミュエルのチームの一員と見られているようだ。

剣士のサミュエル、操霊術師のジャック、神官のカイン、弓使いのクロエディア。

操霊術というのは魔法の一系統で、命と生命、魔法生物に関する呪文が多い。私は魔術師、つまり真語魔法の遣い手で、こちらは神々の戦いの中で発展したという伝説のためか、蛮族と人族との戦いで研究が進んでいるためか、攻撃的な呪文が多い。サミュエルのところは魔術師がいなかったから、私が一緒にいても特に問題はなかった。むしろ、何となくこのチームの一員になるような気になっていた。

「うん、今は私たちと一緒にいいんだけどね。」

“東の砦”に着いたら、どうするの？」

「着いたら、ですか？」

ある晩、私に聞いてきたのはクローディアだった。そういえば、“東の砦”の街は“東の砦”と略されることが多い。今は夜の見張り中で、起きているのはこの焚火では私とクローディアだけだ。耳を澄ますと他のメンバーの寝息が聞こえる。

「師匠って人の許を離れたってことは、独り立ちしたってことよね？ “東の砦”を拠点に冒険者になるの？」

「いえ、独り立ちはまだまだ先です。」

師匠の師匠って方が“東の砦”の魔術師ギルドにいらっしやるので、その方に教えて頂けることになってるんです。だから、一応“東の砦”を拠点に冒険者、ですね」

「そう。じゃ、“東の砦”でいったんお別れね」

「……そうなん、ですか」

それは、私にとつてかなりショックな事実だった。このメンバーと一緒にいることが、心地よくなってきたせいだ。

「実は私たちのチームは“東の砦”までの期限付きのチームなの。まあ、もともと知り合いではあったけど、たまたまお互いのメンバーの都合が悪くなったから、一時的に組んでたの」

このチーム、結構バランス悪いでしょ？　と言われて、やっと気付いた。

「前衛が少ない、ですね？」

「うん。この人数ならもう一人、前衛がいた方がいいでしょ？ 接近戦ができなくもない人達だから、何とかなつただけだね」

「本当はどんなメンバーなんですか？」

「サミュエルとカイン、ジャック、私って分かれるの。」

サミュエルとカインのところは、他に槍遣いと精霊遣いがいて4人。ジャックは剣士と2人で組んでるわ。私のところはあと3人で、剣士、神官、魔術師ね」

そうなると、メンバー構成からいって、私が入れるところはなさそうだな。

ジャックと剣士のペアのところには入れないこともないだろうが、そうすると、操霊術の回復で3人はキツいだろう。

「実は、“東の砦”に着いた後も、このチームにお邪魔してしまおうかと思ってたので、ちょっとショックです」

冗談めかしていうと、本当にね、と返された。クローディアにそう言ってもらえただけでも、よしとすべきかもしれない。

「私のところは一応“東の砦”を拠点にしてるけど、ほとんど根無し草に近いの。」

だから、今回、このチームになって、あなたに会えたのは本当にラッキーだったわ」

「クローディアのチームは“東の砦”に滅多に帰ってこないんですか？」

「うちの剣士がね、旅の途中で別れてしまったご主人さまを探してるから。ご主人さまって人と別れた“東の砦”を一応の拠点にするだけで、情報しだいどこに行くか判らないわ」

「……寂しくなっちゃいますね」

「そうね……」

湿っぽくなった空気を誤魔化すように、その後はいつもの薬草談義に戻った。

こんな話ができるのも“東の砦”の街までだ。

交代の時間になり、焚火の側で横になってからも、私はなかなか眠れなかった。

考えるのは、先ほどクローディアと話したことだ。

個人的にはクローディアと別れるのが一番辛いのだが、実際問題として、“東の砦”に着いてからどうするのかを、そろそろ考えた方がいいのかもしれない。

勿論、まずは魔術師ギルドに行つて、師匠の師匠という方に挨拶

をしなければならぬ。私が冒険者しながら真語魔法の研究ができるように師匠が話をつけてくださったが、細かい点についてはまだ決まっていぬ。

それからチームのメンバー探しだ。

私が冒険者としての仕事と研究を両立させるためには、どんなチームに入るかが重要になってくる。

一番時間の融通がきくのはある程度大きな傭兵団に入ることだが、傭兵団に入るためには一定の実力がないといけぬ。よって今の私の能力では無理だ。

フリーの魔術師としてあちこちのチームに参加するという手もあるが、こちらにも私に実力がないから却下。そもそもよく知らない相手に命を預けるなんて、恐ろしくてできない。

そうすると、一般的だがメンバーが固定したチームに入るのが妥当だろう。というか、それ以外にとるべき手がない。

入るチームについては、いろいろ考えなくてはならないことがある。

まず、人数。

依頼にもよるが、人数が少ないと報酬が多くなる代わりに、リスクが高くなる。逆に人数が少ないと依頼の達成が容易になることが多い代わりに報酬が少なくなる。1件の依頼について報酬がいくらかというものが多いから、頭数が増えるとしても報酬は減ってしまうのだ。理想的なのは3人から6人くらいだと思っている。

次はメンバー構成。

メンバーを前に立って後衛を守りつつ接近戦をする前衛と、魔法による支援や攻撃を行う後衛とに分けるとすると、前衛1に対して後衛1が基本だろう。後衛は回復や支援魔法を使う神官と、攻撃魔法を使う魔法使いの2人は欲しいから2対2で4人。欲を言えば更にもう一人前衛か、状況に応じて前衛ができる人が欲しい。そうす

ると、前衛2、神官1、魔法使い1、前にも立てる魔法使いか弓使い1の5人のメンバーが理想的だろう。

それから、チームの方向性。

これが、そのチームの個性というか、カラーになる部分。冒険者をする理由と言い換えてもいいかもしれない。

例えば、さっきのクローディアの話だと、クローディアのチームはご主人さまって人を探すことが主な目的らしいから、その情報を得るために動く。もちろん、生活もかかってるから普通の依頼もするんだけど、遠くへ行く依頼も積極的に受けたり、情報通と言われるような依頼人の依頼は積極的に受けてコネを作ったりもするだろう。

逆に家族を養うために冒険者をやってるような人だと、あまり町から出ないでできる仕事が多くなるだろう。

私の場合は、……これは師匠の師匠と話してみないとどうともしようがない。

あとは、メンバーの相性や性格だが、これも実際に会ってみないとどうにもならない。

幼馴染とか兄弟や血縁でチームを組む場合が多いらしいから、そういう意味では私は少し不利かもしれない。何といっても現在一人だし。

いや、現実問題としてもとの伝手だけでチームのメンバーを揃えられるのは稀だから、そういうところに潜り込むには一人の方がかえって入りやすいかもしれない。

いずれにしても、知り合いばかりのところには一人、知らない人間が入るのは気まずいんだけど。

すべては“東の砦”の街について、魔術師ギルドに行ってからだと、いうことは、私が今できることは、魔術師としての腕を磨くことと情報収集のみ。

うん。

そう考えがまとまったら、今度は素直に眠れた。

“東の砦”の街へ（3）（後書き）

今回も読んでいただき、ありがとうございました。
あと1話か2話で“東の砦”の街に到着できそうです。

“東の砦”の街へ（4）

冒険者という職業が成り立つためには、冒険者に仕事を依頼する依頼人が必要だ。当然、冒険者と依頼人の仲介をする者も必要になる。

小さな村なら、村長がその役目を担うが、大きな街だとそうはいかない。

ある程度 具体的に言うと、複数の冒険者が拠点とする程に大きな街では、「世話役」がその役を負う。

依頼人は「世話役」に依頼をし、冒険者は「世話役」から依頼を請ける。

「世話役」となるのは、顔が広く、人望のある人物。当然、人を見る目も必要だ。

多くは、冒険者をはじめとする人が多く集まる宿屋や酒場の主が「世話役」となることが多い。が、街によっては図書館の館長や占い師が「世話役」のこともあるらしい。

「世話役」をしてたら占いなんていつするのだろう。

「世話役」になるのは簡単で、周りにそう言うだけでいい。だが、実際に「世話役」を続けるのはなかなか大変だ。

だから、「世話役」であるというのは一種のステータスで、地元の名士だという証でもある。

「東の砦」世話役？

根無し草の私じゃ、全部は分からないわね……」

“東の砦”の街のように大きな街だと、「世話役」も複数存在する。クローディアに“東の砦”の街の世話役を尋ねると、彼女は更に

サミュエルに尋ねてくれた。

「ねえ、地元民？」

『金の雲雀亭』と『跳ねる子猫亭』、『黄昏の百合亭』、『リーシヤの酒場』……。

あと、どこがあつたかしら？」

「あとは、『太古の雨亭』、『真紅の狐亭』、『翡翠の歌声亭』……？」

小さいところがまだあるかもしれないけど、主なところはこんなもんだな。

セレスト、まだどこに行くか決まっていなかったんだっけ？」

サミュエルに問われて頷く。

「まずは行ってから、と思つて。

どちらにお世話になるにしろ、新しい師匠に伺わないとなんとも言えないんですが……。

でも、どんな所があるのか、話だけは聞いておこうと思つて」

「ああ、なるほどね。

一応いくつか挙げたけど、実際、このうちの2つは除外だな」

「2つ？」

「そう。

まず、『黄昏の百合亭』は酒場なんだけど、高級住宅地に近いせいか全体的にいろいろと値がはるんだ。お金持ち相手の割りのいい仕事が多い代わりに、仕事が少ないし、簡単な仕事でもそれなりに腕の立つ者が求められる。

駆け出しの俺たちが行っても門前払いだし、そもそも俺たちが請けられる仕事がない。よって、ここは除外」

要するにお金持ちご用達つてことだろうか。

「まあ、お抱えの冒険者が少なすぎて、しょっちゅう他の世話役に依頼回してるからね。

むしろ、依頼の仲介のための世話役というべきかな、この場合。いつかは『黄昏の百合亭』の依頼を請けて一攫千金、もしくは上と

のコネを作るっていうのが冒険者たちの夢なんだよ」

カインがつけたし、ジャックも頷いている。

高値の花、と。

「もうひとつ。」

『リーシャの酒場』も除外な」

これには私以外の3人が深く頷いている。

「なんていうか、ガラが悪いのよねえ」

「治安の悪い場所にありますがね」

「報酬をもらってでてきた冒険者が襲われて、報酬全部巻き上げられたことがあるとか」

「ある意味、『黄昏の百合亭』とは正反対ってこと、ですか？」

「まあ、そう。」

歓楽街の外れにある酒場兼雑貨屋で、使い方によっては便利なんだが。

あの辺は一人で歩けたもんじゃないし、お勧めできない」

「了解です。」

あえて、危ない橋を渡る趣味はありませんし」

「ま、依頼を請けないまでも、裏への窓口としては便利だから、覚えておくといいさ」

「そうします。」

で、残りは？」

「あとは、まあ、マスターや店の雰囲気にも馴染めるかどうか？」

「そうだね、残りはみんな酒場か、酒場兼宿屋だしね」

「女性の世話役がいいなら『翡翠の歌声亭』ですね」

確かに同性だとちょっと安心かもしれない。

「女冒険者が多いのは『太古の雨亭』か『翡翠の歌声亭』だな」

「『太古の雨亭』の女冒険者はカッコいい2代目目当てばかりよ？」

それはちよつと遠慮したい。女同士のドロドロは近付きたくない。

「あとは……エンブレムで決めたって話も聞いたよ。『跳ねる子猫

亭』と『金の雲雀亭』ね」

「誰だ、その馬鹿は？」

「リチャードとレネの兄妹。」

レネが『金の雲雀』のエンブレム見て決めたって。

『跳ねる子猫亭』の方は誰かは知らないけど」

「エンブレム、ですか？」

「んー、看板のレリーフ？」

「大抵はそうだよ」

「だが、それ以上に大事な意味があって、世話役は、自分のところに所属してる冒険者に同じデザインのブローチやピンを渡すんだ。それをエンブレムって言ってる。」

それは誰でももらえる訳じゃなくて、いくつも依頼をこなして、能力や人柄を世話役が認めた冒険者でないともらえない。

そこには冒険者の名前も入っていて、まあ、一種のお墨付きだな」
「もらうのは大変だけど、世話役が能力と人柄を認めた証明みたいなものだから、それだけの価値はあるわよ」

そうになると、まずはエンブレムをもらうを目指すべき、と。

「まあ、エンブレムなんてまだまだ先の話だからね。
で、セレストは僕たちと同じところに来るでしょ？
クローディアも一緒だし」

「せっかく仲良くなれたので、できればそうしたいですけど。
どこですか？」

「『金の雲雀亭』ってところよ。」

宿屋兼酒場ね。世話役は主人のラルフさんだけど、家族経営だから奥さんが代わりにやることもあるの」

「魔術師ギルドからは遠いです？」

「まあまあ、かな。」

ギルドの職員であの辺に住んでた人がいたはずだ」
それなら問題ないだろう。

あとは、宿から近いか、だけど。

「あと、宿屋で『空を泳ぐ魚亭』が近いといいんですが、ご存知ですか？」

これには4人とも首を振ったので、着いてから探そう。

そんな話をしてから2日後、“東の砦”の街が見えてきた。いや、正確には街をぐるりと取り囲む高い塀が見えてきた。私たちが歩く道も広くなり、道の両脇には畑が広がり、ところどころに農家も見える。

さらに翌日、“南の交易都市”を出発してからちよつと30日。私たちは“東の砦”の街に到着した。

“東の砦”の街へ(4)(後書き)

今回も読んでいただき、ありがとうございました！

魔術師の塔（前書き）

新しい師匠の名前が2転3転しました。
名前で苦しんだ割には、まだでてきませんが……。

魔術師の塔

私は魔術師ギルドへ向かう道を、のんびりと歩いていた。午後も夕方近い時間で、通りは活気にあふれている。

とはいえ、“南の交易都市”のそれとは少し雰囲気が違う。あちらの活気は商人のもの、こちらの活気は戦士のものだ。あちらは商人の街だけあって、派手なことも好きだったが、一種のんびりとした空気があった。

一方、こちらは冒険者や騎士、傭兵が多いし、商人や神官でさえも、いざとなれば武器をとって戦いそうな雰囲気がある。物騒な街というのではないが、見た目よりも中身を重視する堅実さを感じる。

“東の砦”の街に着いたのは昼前だった。

門を入ってすぐの広場でキャラバンが解散し、護衛の私たちはそこで報酬をもらった。

私は、サミュエルたちに魔術師ギルドの場所と「金の雲雀亭」の場所を教えてもらって別れた。

魔術師ギルドは街の北にあった。

別名「魔術師の塔」と言われるように3つの高い塔がそびえたっている。

サミュエルが「絶対に迷うことはない」と言うのも納得できる。

あの高さなら、街のどこにいても見えるだろう。

私は、ギルドからほど近い宿屋で新しい服に着替えてからギルドを訪れることにした。

第一印象が肝心というし、長旅で埃まみれの姿ではあまりに失礼だろう。

サミュエルに教えられた通り、中央の他のふたつより僅かに高い塔を目指す。

入ってすぐのホールは2階分が吹き抜けになっており、広々としていた。

正面に大きな机があり、そこが受付らしい。

魔術師というと偏屈で愛想などとは無縁のイメージがあつたが、迎えてくれたのは生真面目そうではあるが、好感のもてる笑顔の青年だった。

「ようこそ、『魔術師の塔』へ。」

今日はどういったご用件で？」

「こんにちは。」

セレスト・モニエと申しますが、ギデオン・エンフィールド師に師事すべく、参りました。

師にお会いしたいのですが、ご都合を聞いていただけませんか？
師匠に頂いた紹介状も一緒に渡す。既に話はついている、と師匠が言っていたので、断られることはないと思うのだが。

「お話は伺っております。」

ギデオン師の部屋にご案内しましょう」

青年は、他の職員に席を外す旨を伝え、案内をかってでてくれた。

私よりも少し年上だろうか。服装からすると魔術師らしいから、彼もギルドのメンバーなのだろう。

「申し遅れました。」

私はラーシュ・ソランデル。ラーシュと呼んでください」

「よろしく願います」

「こちらこそ、よろしく願います。」

歩きながら、少しこの魔術師ギルドの話をしましょう。

ギデオン師の部屋はこの『太陽の塔』にあります。

ちなみに他のふたつは『月の塔』と……？」

「『星の塔』ですか？」

尋ねるようにならざるを見るのでそう答えると、正解だったらしい。ひねりはないけど、判りやすくいい。

「その通り。」

ちなみに命名は、この塔の創始者です。

そうそう、この街で『塔』といえば、魔術師ギルドを指しますから覚えておいてくださいな。

この『魔術師の塔』はこの街の北の守りとして造られました。

ほら、そこに街の北門が見えるでしょう？

北門から入ってすぐに北の広場。そして、それを取り囲む「魔術師の塔」。

北から入ってきた者は、我々の目をかいくぐって街の中へ入ることはできません。」

石造りの3つの塔は3階部分から下はすべて繋がっており、北の広場をぐるりと取り囲んでいる。

「広場の方から見ると壁のようでしょうね」

「この『魔術師の塔』は侵入者に対する壁ですからね。」

通路は、塔と塔の間の2か所のみ。広場側から塔に入れる所もありません」

「いざという時は、広場に侵入してきた敵に魔法の攻撃を雨のように降らせる訳ですね」

接近戦が苦手な魔術師らしい戦闘方法だ。

ラーシュは、よく出来ましたとでもいうようににっこりと笑った。「街ができて以来、北からの侵略を許したことがないのが塔の誇りです。」

でもまあ、他の門もここほどでないにしろ、しっかりと守られています。

東は傭兵団が、南は各神殿が、西は騎士団がそれぞれ守りを固めていますからね。

それぞれの守り方を比べるのも面白いですよ」

それは、分析・考察が好きな魔術師らしい意見、というべきだろ

う。

「そういえば、西門から入りましたが騎士の姿を多く見かけました」
だが、あれだけという訳でもないだろう。

確かに、余裕ができたら考えてみてもいいかもしれない。

話を聞きながら階段を上り、廊下を進む。

階段も廊下も、小さな窓が多く並んでいる。

その向こうにあるのが広場ということを見ると、換気や明り取りのためではなく、いざという時にはそこから目標を確認して攻撃するためだろう。

そう考えれば、1階の広場側に窓がない理由も、2階の広場側の窓が高い位置にあったのも防御ゆえだろう。

そんな話をしているうちに、ひとつの扉の前にたどり着いた。

多分6階くらいだろう。これを毎日上り下りするのは大変そうだ。まさか、魔術師が運動不足になりがちだから、こんなところで体力をつけさせようという訳ではないと思うが。

いったん外で待たされ、ラーシュが先に入り、すぐに出てきた。

「さあ、どうぞ。」

あ、帰りにもう一度受付に寄ってくださいね。

魔術師ギルドへの加入手続きを行いますから」

「はい。」

案内、ありがとうございます」

ラーシュにお礼を言ってから、扉の中に向かって深々と礼をする。

「失礼します」

言いながら、ギデオン師の情報をほとんど教えてくれなかった遠くの師匠に、心の中で盛大に文句を並べてしまったのは、まあ、仕方のないことだ。

魔術師の塔（後書き）

今回も読んでいただき、ありがとうございました。

PVが1,000を超えました。

スロー更新にもかかわらず、読んでくださる方、お気に入りにしてくださった方々に感謝です！

薬草茶4杯分の交渉

入ってすぐは応接室を兼ねた部屋だと思われた。

ソファとテーブルが見えるし、魔術師の秘密主義を考えれば、外部の人間を入れない部屋があつて当然だ。逆にいえば、今、私が見ている部屋は、まあ、まだしも他人を入れてもよい部屋、つまり応接室の機能があるはずだ。

本来ならば。

ギデオン師の部屋のように、本と薬草とその他よく分らない様々なモノに埋め尽くされていなければ。

いや、呆けている場合じゃない。

軽く（と、信じたい）現実逃避しかけた自分を叱咤して、不真面目に見えない程度に笑顔を作る。中にいたのは2人。ソファにゆったりと腰かけるエルフの青年と、その傍に立つ人間の少年だ。と、すれば、ギデオン師はエルフの青年の方だろう。

「ああ、よく来たね。

とりあえず、その辺にかけて」

声をかけてくれたのはエルフの青年の方。よし、確定。

足元を見すぎないようにして足元に最大限の注意を払うという高等テクニクを駆使しつつ、ソファに近付く。ギデオン師の前まで、何とか転ばずにたどり着いた自分を褒めてやりたい。

「初めまして。

“南の交易都市”から参りました、セレスト・モニエと申します。よろしくお願いいたします」

言い切ってから、先ほどよりも深く頭を下げる。

「セレスト、ね。」

これによると、エリヤ・ランカムの弟子だとか？」

「はい」

「ふむ。」

あのクソガキは元気かな？」

「は……？」

今度こそ絶句したのは、私のせいではないはずだ。

大きく目を見開いたまま硬直した私に、ギデオンは更に続ける。
「いや、答えは判ってるから言わなくていいよ。」

憎まれっ子、世にはばかるなんて言葉があるくらいだしね。全くいい加減どこかで野垂れ死んでるのかと思っただのに、しぶとく生き残って“南の交易都市”で店を構えてるなんて驚いたよ。もっとも、仮にも僕の弟子が無様に野垂れ死になんて有り得ないんだけど。イゼベルもついてるんだしね。それにしてもイゼベルを落とすなんて一体どんな手を使ったんだか、僕には想像もつかないよ。まさかとは思うけど、イゼベルを泣かすような真似をしてはいないよね？
いくらクソガキの馬鹿弟子とはいえさすがにそこまで馬鹿だと師としてブチ殺しにいかないといけないからね。昔からホントに……」

「お師匠、お茶が入りましたよ」

いい香りがするお茶がテーブルに置かれ、流れる水のように淀みなく紡ぎだされる師匠への罵詈雑言がやんだ。

先ほど、ソファのそばに立っていた少年だ。いつもお茶を淹れたのだろう。全く気付かなかった。

さすがに喉が渴いたのだろう。ギデオン師がカップに手を伸ばすのを見て、私もお茶を飲む。いわゆる紅茶ではなく、薬草茶だ。それを飲んで、ようやく思考が戻ってくる。

それにしても、凄かった。人間とエルフという種族を考えれば当然かもしれないが、私の師匠、エリヤ師匠は外見上は壮年で、ギデ

オン師は青年だ。なのに、外見上は年上のエリヤ師匠をクソガキ呼ばわりの上、言いたい放題。エリヤ師匠が聞いたら頭から湯気を出して怒り狂った挙句、10倍返しくらいの勢いで言い返しそうだ。そう言えば、いつだったかギデオン師のことを「クソジジイ」と言っていたかもしれない。そう考えると、この師弟は似た者同士ということなのだろう。その両方に教える身の自分のことは、考えないでおくべきだろう。軽く落ち込みそうだ。

ギデオン師はゆつくりと2杯の薬草茶を飲み干し、改めて私に向きなおった。

「で、セレストだったね。」

馬鹿弟子の手紙によると、外弟子って扱いにしてほしいってことだけど、詳しく話してくれる？」

「はい。」

実は、冒険者をしながら学びたいので、外弟子の形をとらせて頂きたいのです。

もちろん、街にいる間はお手伝いも雑用もいたします。

真語魔法についてはエリヤ師匠の下である程度学びましたので、一からギデオン師のお手を煩わせることはないはずです。」

「ある程度学んでるなら、僕について今更学ぶ必要ないんじゃない？」

「ギデオン師は薬草と魔法薬の第一人者だと伺いました。

私が学びたいのは、主にその分野です。」

「ふうん。」

で、僕にメリットは？」

「街にいる間のお手伝いと、あと、写本を。」

ギデオン師の指示に従って写本をいたします。

それを弟子としての労働の代わりとできないでしょうか？」

本は基本的に手書きで写すしかないから、大量生産ができない。

この写本の技術もなかなか重宝されるのだ。案の定、ギデオン師

が興味を持った。

「腕前は？」

答える代わりに持参した本を手渡す。

ギデオン師の著書を写したものだ。

ギデオン師はしばらく黙ってページを捲った。

このために細心の注意を払って写したものだ。エリヤ師匠のお墨付きは頂いたが、やはり緊張する。

「まあ、いいだろ。」

ひと月に1冊？」

「ページ数によります。」

ひと月のうち、20日は冒険者の仕事をするとして、残りの10日のできる分ですから、1日7ページでひと月に70ページくらいで」

「無理。200ページ」

「それでは、冒険者として働く時間がなくなってしまいます。」

ひと月75ページで」

「そもそも冒険者なんてしなければいいんだよ。」

180ページ」

「それでは生活が成り立ちませんし、フィールドワークができなくなります。」

78ページ」

「冒険者なんてしてたらフィールドワーク自体できない。」

フィールドワークがしたいなら、フィールドワークだけをすべきだ。

170ページ」

「確かにフィールドワークはなかなかできないでしょう。」

しかし、私はお金を稼がなくてはならないんです。

お金稼ぎと学問を両立させるには、他に方法がありません。

80ページ」

交渉は30分に及んだ。
少年がお茶を4回淹れ直してくれた。

「よし、100ページ。
決定だな。」

「はい。」

でも、内容によって多少考慮してくださいね」

実際、写本はそれだけで勉強になるから一石二鳥なのだ。
とはいえ、ひと月に100ページは結構ギリギリのラインだ。

冒険者という危険な職業のため、労働は前払いだったが、ひと月
100ページ分の写本と引き換えに、本の内容（知識）と雑用免除
とギデオンの講義。
うん、十分な成果だ。

薬草茶4杯分の交渉（後書き）

今回も読んでいただき、ありがとうございます。
亀更新ですが、楽しんでいただければ幸いです。

ギルド登録

ギデオン師の部屋を辞した後、ラーシュに言われた通り、受付へ向かう。

来た道を引き返したただけだが、あやうく迷子になりそうだった。廊下が薄暗いのがいけないのだ。そうに違いない。

先ほど案内してくれたラーシュがいたので、そこでギルドの登録をしてもらうことにする。

「セレストは以前のところでも魔術師ギルドに登録していたんですか？」

羊皮紙を一枚差し出しながら、ラーシュが聞く。

「はい、こちらに来る時に脱退届を出してきましたが」

「でしたら、詳しい説明はいらないかもしれませんが、一応規則ですでお話しますね。」

この“東の砦”の街の魔術師ギルドは、現在構成員が600人ほど。この中には教授や修行中の弟子、真語魔法を使えない雑用係も含みます」

600人か。

もつとも、冒険者を中心に実際のところはもう少し多いのだろう。ギルドの援助が全く受けられなくていいのなら、登録しなくても罰則も特にないのだし。

「長は“紅き天空の怒り”のロッテ・ヴェルター師。

ロッテ師はギアス平原の戦いの英雄でもあり、9年前の蛮族の大侵攻では塔の戦闘の指揮も執られました」

歴戦の勇者だ。私も名前くらいは聞いたことがある。元冒険者で、その髪色のせい、放つ魔法が赤みがかって見えるとか。髪色のせ

いで放つ魔法に色がつくはずはないと思うのだが。

とにかく、素晴らしい魔術師なのだ。二つ名を持つくらいだから実力があるのは勿論だが、軍としての魔術師を動かす將軍としての才もあるのだろうと思っている。

同じ女魔術師としても憧れるところだ。

「構成員は月々決まった金額をギルドに納め、ギルドは知識や情報施設の提供、仕事の斡旋などを行います。まあ、例外もありますがここでは省きます。セレストには関係のないことですし。

ギルドに納めるお金は、月に50セト。それとは別に加入時には500セトいただくことになっています。あと、どなたか師匠につく場合の謝礼は各自で師匠に支払っていただきます。その点はギデオン師と相談してください」

頷く。それは何とか労働に替えてもらった。

「月々の納入金は、ギルドが認めれば労働や他の品物で支払うことも可能です。

どうされますか？」

こちらでも書写は認められそうな気はするが、止めておく。そんなことをしたら本当に冒険者の仕事ができない。

「いえ、お金で支払います。替えられそうなものがありましたら相談します」

1トリンは1000セト。加入金は高いが、月々の納入金はなんとかなるだろう。

向こうでもそうだったから、これは仕方ない。

「例えば、長期間留守にするなどで月々支払えなかったときはどうなりますか？」

冒険者をしたら、数か月単位で留守にすることもあるかもしれない。

「その時はまとめて支払っていただければ結構ですよ。

できれば前払いをしていただけると助かりますが、後払いでも結構です。ただし、支払がない場合はギルドの施設が利用できませんので気を付けてくださいね」

図書室が使えないと書写をすることができない。支払いを貯めないようにしないと。

でも、後でいいなら、長期間留守にしたときは、その後にここに来て、払うという形でもいい訳だ。

「それから、1年間、支払いも連絡もない場合はギルドを脱退したとみなされますのでご注意くださいね。

1年以上経過した場合は、新規加入の手続きをとらせていただき、もう一度加入金を支払っていただきます」

逆に言々と半年留守にするなら、一度脱退した方がいいのだろうか。

「そうですね、半年単位で納入金免除許可がでますから、その時は相談してください。

冒険者の方は結構利用していますよ。アクシデントに遭われて、手紙で免除許可の申請をされる方もいますね。

ただし、その場合も1年間連絡がなければ脱退扱いですからね」
納入金免除はいずれ利用するかもしれないから覚えておこう。

「構成員には、納入金のほかにいくつか義務が課せられます。

ひとつめ、住まいと連絡先をギルドに届け出ること。

セレストは冒険者ということですから、定宿と世話役を教えてください
たきます」

まだ決まっていないというと、決まったら連絡すればよいのとのこと。

羊皮紙の2つの欄が空欄のままとなった。

「旅行や仕事などで街から出る場合にも届け出が必要です。

受付に言っただけばいいので、必ずお願いしますね」

冒険者としての仕事の前後には必ず塔に報告に来ないと行けないのか。

少し面倒な気もするが、どちらにしても、冒険者としての仕事がない時は、書写をしに塔に来るだろうし。

「ふたつめ、万が一のときにはギルドの指示に従って防衛戦に参加すること」

これは“東の砦”の街ならではだろう。なるほど、さつきしくいくらいに所在の確認を言っていたのはこのためか。

「ただし、冒険者の分担は砦の壁になるでしょうから、そちらで戦いに参加することは認められるでしょう」

確かに、塔にだけ魔術師が集まって、そのほかの場所にはゼロなんてことは、有り得ない。

そんなことは起きないで欲しいものだが、これまでの蛮族の侵攻の様子を見ていると無理なんだろうな。

その他こまごまとしたことを聞いて、550セトを支払い、最後に私の名前を書いて手続きは終了した。

判ってはいたが、痛い出費だ。

ギルドの構成員であることを示すピンは、名前を彫るため3日後に取りに来るように言われた。ラーシュのものをを見せてもらうと、塔と魔術師の象徴である杖がデザインされたものだった。このピンが50セト。ピンと交換で支払えばいいとのこと。

何というか、もう泣きそうだ。

「そうそう。」

ギルドは基本的に夜明けから日没までです。

受付業務や各出入り口はその時間しか開いていません。それ以外の時間に入入りする場合は太陽の塔の街側の通用口を使ってください

い」

「通用口、ですか？」

「そこですよ」

ラーシュが指す先には人ひとりが出入り出来るほどの小さな扉。私が先ほど入ってきたところの脇にあった。

「あと、次に来たときにギルドの施設を案内していただきたいのですが、どなたに頼んだらいいでしょう？」

「時間内に受付に来ていただければ、私がご案内しますよ。」

ここ数日は他に大きな仕事ありませんから」

そう言っていたいたので、お願いすることにした。

「よろしく願います」

ずいぶんと軽くなった財布を持って、塔を出た。

ギルド登録（後書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。
やっと塔パートがいったん終了です。

初日の夜、『金の雲雀亭』にて

目指す『金の雲雀亭』にたどり着いたのは、日が完全に落ちて随分経ってからだった。

『金の雲雀亭』は街の西、昼間、キャラバンが解散し、私がクローディア達と別れた場所から少し歩いた所にあった。

塔が街の北の端にあるとはいえ、最短ルートを辿れば1時間もかからないのではないだろうか。

「セレスト！」

「遅いわよー！！」

入るとすぐに声をかけてくれたのはクローディアだ。

サミュエルやカイン、ジャックも声をかけたり、手を振ったりしてくれる。

同じテーブルにいる人達は、彼らの知り合いだろうか。

人間の女性が2人。小柄な少女と、ほっそりとして栗色の長い髪が美しい若い女性。それからエルフの男性が3人。服装からすると魔術師、神官、戦士だろう。

入った時に一瞬集まった酒場中の視線も、私が彼らの知り合いと判ると、ほとんどが興味をなくしたように外れていく。

こういうところは冒険者だなあ、と思うが、今はそれどころではない。

「すみません、遅くなりました」

「あんまり遅いから、来ないかと思ったよ」

カインがクローディアの隣を空けて、フォークや取り皿を差し出してくれる。

いつもの彼の気遣いが、今日はやけに胸に沁みた。

「塔を出たのはまだ夕方だったんですが、道に迷ってしまっ……」

地図の通りに進んだはずなのに、一向にたどり着かなかったのだ。自分が方向音痴の自覚はなかったので、かなりシヨックだった。トラブルも結構あったし。

「それは災難でしたね」

ジャックがとりあえず、と果実酒を差し出してくれる。この街に慣れるまで、一人で歩くのは避けるべきだろうか。

「さ、セレストも来たことだし、もう一度乾杯しましょ」

クローディアが言って、サミュエルの音頭で乾杯した。

その後、同じテーブルの人達に紹介される。

「さつきも話したけど、魔術師のセレストね。」

“南の交易都市”から来たの。薬草にも詳しいわ。

まだ、どのチームにも入ってないから、いい所があったら紹介してあげてね」

よろしくお願いします、と頭を下げると、クローディアを挟んで反対の席から手が挙がった。

「はいっ、ココ、いーとこですよ！」

クローディアちゃんの仲良しさんなら、大かんげーですっ。

あ、あたしはナルシッサ・メイ。剣士です。シシーとよんでくださいね！」

小柄な少女が人懐こい笑顔で声をかけてくれた。申し出は嬉しいが、確か、クローディアのチームには魔術師がいたような……。

「シシー。それはつまり、俺はお払い箱っていうことかな？」

ナルシッサの隣のエルフの魔術師が聞く。もう魔術師がいるなら私が入る余地はないはずだから、その質問はもっともだ。

「そんな訳ないじゃないですか。」

カノプーもセレストちゃんも、いっしょでいいと思いますよ。

みんな一緒の方が楽しいです」

うん、深い意味があった訳ではないらしい。いつものことらしく、周囲も笑って見ているだけだ。

「馬鹿か、この考えなしめ！」

チームを魔術師だらけにしてどうするつもりだ？」

彼のこぶしがシシーのこめかみをぐりぐりと圧迫する。かなり痛そうだ。シシーがごめんなさい、と悲鳴をあげたのを見ながら、その隣の男性がごめんね、と謝る。

「いつものことだから、気にしないでね。」

僕はアイク。で、教育的指導中の彼はカノープス。

シシーはああ言ったけど、うちはカノープスって魔術師がいるから。

シシーは戦いではそうでもないんだけど、どうも頭のネジが飛んでね」

シシー、そんなに考えなしじゃありません！という涙目の抗議は無視された。

「えーと、クローディアからもチームに入れないことは聞いているので、大丈夫です」

何と言うか、楽しいチームだ。クローディアも苦笑している。

それを見ながら、ジャックが隣の女性を紹介してくれる。

栗色の髪的女性だ。剣士らしいのと明るい表情はシシーと一緒にだが、シシーを見た後のせいか、大人びてしっかりして見えた。

「まあ、次はこちらの紹介をしますね。」

私のチームのメンバーで妻のディアナ。剣士です」

妻、というところに力を入れたな。と、いうか。

「いつ、そういうことになったんだ！？」

その紹介に、私の周りの方が驚いていた。

「式はまだですよ。」

でも、皆さんを招待しない訳にはいきませんからね」

予定を空けておいてください、というジャックに隣のディアナも恥ずかしそうに笑って、セレストも来てね、と声をかけてくれる。

幸せいっぱいの雰囲気はこちらまであてられそうだ。

ジャックとディアナの結婚を祝ってもう一度乾杯をした後、残る

一人が立ち上がった。

「あとは、俺だね。」

サミュエルのチームでエリ阿斯。

エリーって呼んでいいよ」

エルフの青年が握手を求めるので、応じつつ、固まった。

エリーって……。

「変人だが、気にしなくていいぞ」

サミュエルが助け舟を出してくれる。確かに女性名を愛称にするのは変わっているが。

「いえ、でも、師匠の名前と似ているので『エリー』は遠慮させていただきます」

エリヤでエリー。

師匠の愛称も『エリー』だった。最も、愛称で呼んでいたのはイゼベルさまだけだったけど。と、いうか、イゼベルさま以外が『エリー』と呼ぶのを許さなかったのだ、師匠が。

「師匠の名前と似てるの？ 運命だね！」

そうは思わないが、エリ阿斯の中ではそうならしい。

こういう軽薄な感じは苦手だ。

いつの間にか握手していた手が握りこまれている。その手を引こうとしたら、木片が落ちた。

「あれ？ 何か落ちたよ」

結果としてエリ阿斯の手が離れたのでほっとする。

「あ、私のです。」

ここに来るためにサミュエルに書いてもらった地図です」

紙は高価なので、薄い木片に簡単な地図を描いてもらったのだ。受け取ろうと手を差し出したのだが、エリ阿斯が首を傾げた。

「これって、『金の雲雀亭』の地図？」

頷くと、更に首を傾げる。

「この地図、違ってるよ？」

違ってるよね、とカインにも木片を見せるので、一緒に覗き込む。

いや、見ても違っていろいろかは判らないんだけど。

「え？ そんなはずないぞ。」

まさか『金の雲雀亭』の場所は間違えないだろ」

話を聞きつけて、サミュエルも後ろから覗いてくる。

そして、顔を引きつらせてそうつと下がる。

……つまり、その行動の意味するところは、ひとつしかない。

「えーと……うん。違うね。この通りが違う」

「だろ？」

「じゃ、私が道に迷ったのって……？」

「この地図じゃ、迷って当然だな」

エリアスのそれは慰めなんだろうが、方向音痴でないらしいと判ったのは嬉しいが、今は嬉しくない。

「じゃ、真っ暗になるまで街をうろつく羽目になったのって……」

「サミュエルのせいだな」

エリアスが断言し、クローディアとジャックがサミュエルを両側から押えた。

「うろろろしてる間に酔払いに絡まれたのも、サミュエルのせいですな……」

「待て！ それは俺のせいじゃ」

ない、と続けようとしたのだろうが、その前に口にパンを突っ込んでやった。

「酔っ払いに絡まれたのが2回、ナンパらしきものが1回、路地に連れ込まれそうになったのが1回、なんだかよく分らない輩に声をかけられたのが3回。」

いかにも地元民じゃない、駆け出しの若い女の魔術師なんて、いいカモだと思われたんでしょうね。おまけに迷子ですし？

キョロキョロして挙動不審ですし？」

サミュエルが気まずそうに眼を泳がせるが、まだ許すものか。

「すっごく、怖かったんですよ、私」

自分が道を間違えたせいだと思っていたが、まさか、地図が違っ

ていたなんて。

「往生際が悪いですよ」

「サミュエル、ごめんなさい、した方がいいですよ？」

ジャックの冷たい視線に、シシーの一言がとどめとなった。

誠心誠意謝ってもらい、ついでにここの支払いはサミュエル持ちになった。調子に乗ってそこまでさせたのはエリ阿斯とクロードイアだったが、10人分は少し可哀相だったかもしれない。

初日の夜、『金の雲雀亭』にて（後書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。
少しずつ読んでくださる方が増えていて、びっくりするやら嬉しいやら、です。

更新ペースは遅いですが、楽しんでいただけるよう、頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1326s/>

セレストの旅

2011年9月30日03時12分発行